

日交研シリーズ B-187  
講演会  
刊行：2019年12月

転換期の都市交通計画  
Urban Transportation Planning at a Major Turning Point

高見 淳史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻准教授）  
Kiyoshi Takami

要 旨

本報告書は、2019年9月25日（水）に開催された講演会「転換期の都市交通計画」の内容をまとめたものである。

都市交通計画はこれまで、交通手段別の計画から総合的な計画へ、需要追従型の計画から統合パッケージ型へ、住民参加の交通まちづくりへ、車中心から人間中心へなど重要な転換点を幾度か経験してきた。そして、とりわけ交通に関する新しい技術・新しいサービスが登場しつつある昨今から近未来にかけて、都市交通計画はまた重要な転換期にある。本講演はそうした時代の都市交通計画のあり方と課題を考えることを狙いとしている。

第一に、都市交通計画の歴史を振り返り、転換点をもたらしたものとして、新技術の登場と普及、データ収集・計画技術の発展、社会的要請の広がり、実現のための新たな手法・制度の4つを挙げ、今般の新技術・新サービスがまた新たな転換期をもたらすとした。

第二に、新技術・新サービスの特性と影響を概観し、現在の政策トレンドに反する点があること、特にコンパクト+ネットワークとの擦り合わせが重要であることを説いた。

第三に、交通サービスを束ねるサービスとしての MaaS (Mobility as a Service) を取り上げ、MaaS の時代の都市交通計画には、各種プレイヤーを明示的に位置付けた分析と、施策＝公的介入の方法の再検討が必要であるとした。この中で空間とサービスのつくり方・使い方への介入が特に重要であり、政策トレンドとの調和を図るヒントを提示した。

第四に、新技術・新サービスがはらむ「深い不確実性」に対処し得る意思決定アプローチの必要性を訴えるとともに、都市交通計画における分析に求められることを示唆した。

講演を踏まえて、フロアから質問、意見が活発に出された。

キーワード：交通の新技術・新サービス、MaaS、深い不確実性、分析手法

Keywords : New technologies and services of transportation, Mobility as a Service (MaaS), Deep uncertainty, Analysis method